岐阜県大野郡白川村における住民団体活動の実態調査
～山間地の村落共同体における住民参加研究の一環として～

Research Project on Activities of Community Groups in Shirakawa Village, Gifu Prefecture
－Part of a Study on Community Participation in Hilly and Mountainous Areas

大　井　智香子

Chikako OHI

Abstract:

岐阜県大野郡白川村は、それぞれの地区で祭礼行事や住民活動が活発に行なわれ、住民活動も盛んである。また、行政はこれまでにも毎年「住民座談会（地区別懇談会）」を開催し、折々の村政の議題について話し合いを重ねてきた。2003（平成15）年の9月から10月にかけて開催された座談会は、全地区ともに共通して全住民の約６人に１人という参加率であった。これらは伝統的な慣習によるものなのか、または都市化によるまちづくり運動、ボランティア活動への関心の高まりによるものなのか、それ以外の理由があるのだろうか。

これらについて明らかにするための作業の一貫として、村内で活動している諸団体を対象に調査を実施し、住民活動の特徴の整理を試みたので、報告する。

キーワード：

地域福祉　住民活動　ボランティア活動　山間地　村落共同体

１．はじめに

近年、福祉コミュニティへの関心がますます高まっている。福祉コミュニティとは、1970年に岡村重夫によって提示された概念であり、その後、社会福祉学者により理論化が試みられ、現在では一定の共通認識を形成しつつある。『福祉社会辞典』で上野谷は「一般的に用いられる地理的なコミュニティに対して、地域社会を基盤としつつも社会的不利条件を持つ少数者の状況に関心を持ち、彼らの社会関係の回復・改善を中心に据え、サービスの供給とその基盤整備としての福祉環境づくり、住民の福祉意識・態度の変容を公私協同で図ろうとする機能的コミュニティのひとつである。」[1] としている。濱野は、福祉コミュニティに関するいくつかの定義を引用しつつ「その中核は援助を必要としている人びとであることが福祉コミュニティの特徴である」[2] と指摘している。これらの定義からは、地域特性による差異は感じられない。

また、奥田道大、越智 昇ら社会学者による理論化と実証研究も多く試みられている。奥田、和田らは福祉コミュニティ創生に向けた取り組み事例を収集、分析しているが[3]、その中で越智は、これらの事例は「都市型社会のなかに、人と人、人と機関の公共性をそれぞれ個性的に創りつつある姿[4]」であるとし、私的な定義として「福祉コミュニティとは、新しい共同社会として最も成熟したものであるらしい。“新しい”といっても過去を否定して最先端を走るという意味ではない。共同社会といっても、固定化するようなものではなくて、シンはしっかりしていながら、柔らかい自己革新性をもち、流動する異質性をとりこみ、そして都市型社会を人間のために変革するところの、科学的にはまだ解明されていない新しい高次の方程式に相当するような重大な問題性をもっていると想定される」[5] としている。この定義などは、都市化された地域社会を背景にしたものである。

従来の「福祉コミュニティ」の定義に共通しているキーワードをあげるとすると、ノーマライゼーション、異質性・多様性の高い許容、自律、住民の参画などになる。これらを、未だ完全に都市化されておらず伝統的村落共同体の特徴を残している地域に当てはめてみるとどうだろうか。例えば濱野の指摘にある「一般的コミュニティから排除されがちな当事者の発言を大切にする」[6] こと

は、多様な属性の人々が行き交う都市部においてより、所属メンバーが均一的（画一的）、排他的傾向が強く「各自の家がすべて長い過去からの歴史を背負って」[7]「現在だけでなく過去をも知りつくした人間が歴史的な社会関係の重みを背負いながら」[8] 創りあげている村落共同体においては、より困難なこととは言えないだろうか。越智らの定義には、この「一般コミュニティから排除されがちな人の参加」という視点が希薄であるといわざるを得ない。

現在においても、神事祭礼や農作業、自治会活動など近隣とのつながりが深い山間地の村落共同体では、都市部において失われた「コミュニティ」としての機能をより多く備えているにしても、従来のままでは「福祉コミュニティ」とは言えないだろう。これまでのコミュニティワーク研究の多くが都市化された地域社会を想定して展開されているため、完全には都市化されていない地域には該当しない部分もあるように思う。コミュニティワークの手法や展開過程に、地域特性を加味し吟味する必要があるのではないだろうか。このような問題意識に基づき、まずは山間地で伝統的な村落共同体の特色を残している地域の住民活動の特徴の整理を試みた。

2．調査の位置づけ

本調査は、山間地に位置する村落共同体であり、旧来からの共同体「結」を村の活動の象徴とする白川村における、近年の住民活動の実態を描き出す作業の一部である。

岐阜県大野郡白川村は、荻町（おぎまち）地区、鳩谷（はとがや）地区、飯島（いじま）地区、北部地区、戸島地区、南部地区の6地区に分けられ（**図1**[9]を参照のこと）それぞれの地区で祭礼行事や住民活動が活発に行なわれている。また、行政はこれまでにも毎年「住民座談会（地区別懇談会）」を開催し、折々の村政の議題について話し合いを重ねてきた。近年では、第五次総合計画の策定、市町村合併協議、地域福祉計画などである。2003（平成15）年の9月から10月にかけて開催された座談会には筆者も参加したのだが、全地区ともに共通して、全住民の約6人に1人という参加率であった。この年は「容器包装リサイクル分別収」の説明と「地域福祉計画」の懇談会がテーマであったため、「ゴミの分別方法を知りたい」という目前に迫った問題への対処という意識が住民の中にあったことは想像されるが、このことを踏まえても住民の生活に対する関心の高さに驚かされた。

また、人口約2,000人の白川村において、児童育成、スポーツ、まちづくり、福祉活動、伝統芸能や伝統家屋の保存、猟友会、山岳救助隊などかなり多様な形で様々な活動に住民が携わっている[10]。これらは伝統的な慣習によるものなのか、または都市化によるまちづくり運動、ボランティア活動への関心の高まりによるものなのか、それ以外の理由があるのだろうか。

このことについて明らかにするための作業の一貫として、村内で活動している諸団体を対象に各グループの活動状況、住民の参加形態、及び参加意識、参加の動機などを明らかにし、参加の要因分析を試みたので、報告する。

3．白川村の概要

（1）地勢

白川村は、東経136°54′23″、北緯36°16′18″の岐阜県北西部に位置し、村の面積356.55㎢（岐阜県の約3％）のうち95.7％を山林が占めている。周囲を急峻な山々に囲まれた農山村である。岐阜県と富山県、石川県の県境に位置し、石川県と接する西側には白山国立公園、村の東側には天生県立自然公園がある。このあたりは飛騨地域の中でも山ひだが険しい地域となっており、その急斜面地の間を縫うように流れる庄川の流域に沿って集落が形成されている。また、日本有数の豪雪地帯であり、多いときには2mを超える積雪[11]が、冬季に周辺地域との交流を遮断した。これらの自然環境により、古くは秘境とも呼ばれてきた地域である。

白川村は境界を、岐阜県の1市2村[12]、富山県の3村、石川県の3村、あわせて1市8村の地方自治体に接している。周辺地域では市町村合併が進んでおり、白川村は2005年度内には、飛騨市、高山市、南砺（なんと）市、白山（はくさん）市といった広大な面積を有する市に囲まれることとなった[13]。

（2）人口

人口は、2003年10月1日現在で1933人（男性966人、女性967人）、65歳以上の高齢者は491人（高齢化率25.4％）、75歳以上の高齢者は243人（12.6％）である。1960年代のダム建設により大幅に人口が増加したが、平成2年の国勢調査以降その数は1,800人台後半から1,900人台前半にほぼ定着していた。しかし、近年は国内動向に反して人口はやや増加傾向にあった[14]。これは、高速道路などの建設工事に携わる一時的な転入者が含まれていることなどが要因として考えられる。2000年（平成12年）の国勢調査の結果、村の人口は2,151人で、人口増加率（13.6％）が県内第1位の数値であったが、各種建設工事が終了とともに村の人口は大幅に減少することが予測される。また、出生率の高さは注目に値する。1998（平成10）年から2002（平成14）年の合計特殊出生率の平均値は2.06[15]で1位であり、1995（平成5）年から1997（平成9）年までの合計特殊出生率の平均値より0.02上昇している。同時期の全国の値は1.36であり全国的にみても非常に高い数値である。この理由についての要因分析は未だなされていないとのことなので、今後取り上げたいテーマである。

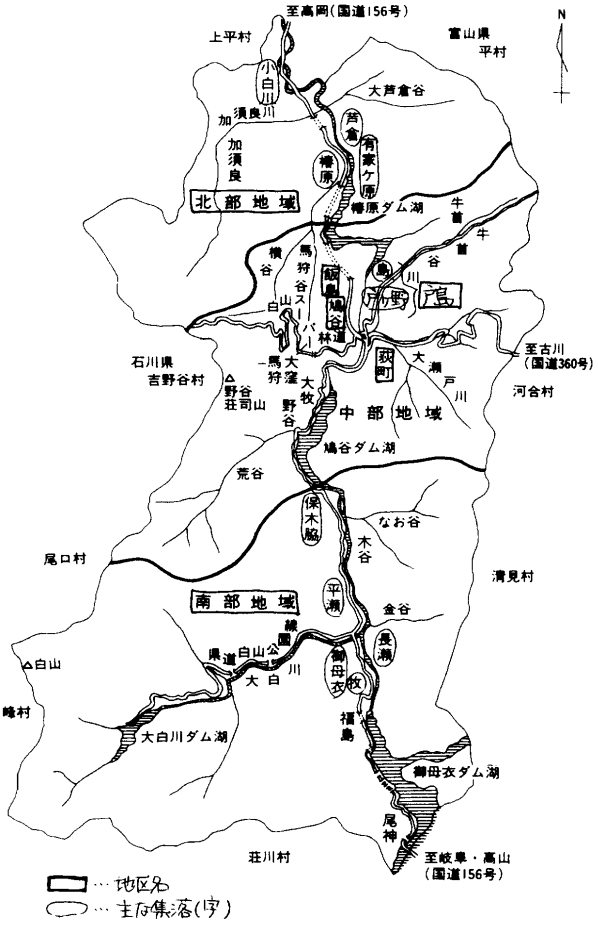

図 1　白川村の地域区分

※『新編 白川村村史 中巻』「計画における地域区分」図に加筆

（3）産業構造

村の人口構造及び産業構造を大きく変化させたのは、1951（昭和26）年に始まるダムや発電所の建設と1995（平成7）年の合掌造り集落の世界遺産登録である[16]。電源開発による発電所の建設は、成出発電所を始めとして御母衣第二発電所建設まで10年以上に渡って進められ、この間の転出入人口は数千人に上る。また、世界遺産への登録は、年間60万人前後であった観光客数を140万人に増加した。これに伴い、観光関連の施設整備が急速に進められ、村の産業構造や経済の仕組みを大きく変化させた。

近年の産業別人口を見ると、第一次産業が1.4%、第二次産業が49.6%、第三次産業が49.0%となっている[17]。山間地であるため耕地が狭く、農業の発展が困難な土地柄である上に、村の面積の95.7%を占める森林はその過半数が国有林であり産業の発展も困難である。これに加えて年間約４ヶ月の間、雪に閉ざされる地域であることから、第一次産業の生産状況は極めて厳しい。更に労働力の高齢化が拍車をかけ、第一次産業の衰退化が進んでいる。第二次産業は、村の主力産業として建設業や生コン・砕石業が位置づけられている。建設事業の拡大により成長したこれらの産業は冬季でも降雪に対応しながら事業を進められることにより、通年就労の場の確保に貢献してきた。今後、高速道路などの大規模な建設工事の終了や、国内的な公共事業の抑制により、その展望は非常に厳しいと予測されている。第三次産業は、荻町地区の世界文化遺産登録後、更に急速な伸びを見せ、観光産業の発展が村内経済に潤いを与えているものの、その急速な発展が村の自然や社会環境に様々な影響を与え始めてもいる。

（4）生活圏

住民の生活圏は、県事務所のある高山市と隣接県である富山県砺波方面に広がっている。高山市までは国道156号線と158号線を経由して約80km、自家用車を利用しても１時間30分から2時間かかる。富山県砺波市までは約50km、東海北陸自動車道を利用すれば1時間かからない。自動車道開通前から国道304号線を経由して、大きな買い物や病院は砺波方面を利用する傾向があったが、道路網の整備により日常の行動範囲は砺波方面を中心として更に広がっている。日常生活圏の広がりは、生活を便利にするとともに観光産業を除く地域小売店の経営を厳しいものとする要因ともなっている。

（5）結

白川村を象徴する言葉に「結（ゆい）」がある。「結」とは、労働力の互助組織であり、全国各地で、田植えや稲刈り作業、山林や水の管理などが営まれてきたもので、白川村独自の習慣ではないが耕地が限られたこの地域での家単位での農作業や合掌家屋と「結」は分かち難い関係にある。世界遺産に登録された荻町の合掌家屋は他の地域の合掌家屋と比しても大きく、茅葺の屋根の維持には多くの人手を必要とする。近年、人口の減少や高齢化、住民のライフスタイルの変化とともに「結」組織は縮小してきており、現在は地域住民や財団法人世界遺産白川郷合掌造り保存財団[18]が中心となり、多くのボランティアの参加を得て屋根葺きが行なわれている。そして、このことが「現代版 結」として、注目を集めることなり、白川村を特色づける要因のひとつともなっている。

結は、一定の強制力のあるシステムであり、自発性・自律性を基本とするボランティア活動とは異なるものであるが、住民にとって馴染み深い言葉である「結」のなかにある連帯、助け合いといった意識を「現代版 結」として、住民の自発的なまちづくり活動への意欲に結びつけようとしていることが伺える。第五次総合計画の中の3つの重点施策の一つ「白川びとの美」には、「『結』に象徴されるやさしく、思いやりのある美しい村民の心を、新しい時代の人々に伝えます」「わたしたちの村に根付く『結』という助け合いの活動と精神を継承すると共に、様々なボランティア活動に積極的に取り組むなど、新しい『結』の文化を創造します」[19] とうたわれている。

住民座談会などを中心として、幾人かの村民の方にお話を伺った限りでは「結」を懐かしみ、伝えていきたい、大切にしたい、または、なくなったことを悲しむ意見には出会っても、「面倒である」「わずらわしい」という人には出会ったことがない。もっとも、懇談会とは地域社会や自分たちの生活に関心の高い人が参加するものであるから、広く意識調査を実施しないことには住民の意識を述べることはできないが、近隣づきあいが希薄化し地域活動への参加が減少する時代にあって、懇談会への参加率の高さ（約６人に１人）と、結に対する人々の意見が、筆者が白川村に注目するきっかけとなった最も大きな理由である。

このほかにも行政は、様々な場面で「結」を白川村の象徴として用いている。例えば、「白川村村政要覧」の表紙には、“結わえた”茅を背景に大きく「結」の文字が入っている[20]。外部の人間、ことに都市に住む人たちは「結」という言葉との響きと、それにまつわる多様なイメージ、例えるなら合掌屋根の葺き替え、田植え、稲刈り、雪深い隠れ里など、古き良き時代、失ってしまった懐かしいふるさとの幻想を見ているのかもしれない。これは、村の主要産業である観光という観点からみると、白川村の独自性を際立たせる上でも有効な戦略とも言えよう。

３．調査の概要

白川村の住民活動を行なっている団体に対して、以下のような調査を実施した。

（１）対象、調査方法、回収率

岐阜県大野郡白川村内で活動する住民団体55団体を対象とした。具体的には、白川村第五次総合計画[21]に「村のコミュニティー」として掲載されている団体を中心に、役場担当課職員に相談に乗っていただき、団体を選定した。

選定に当たっては、まちづくり、福祉、教育活動を目的としている団体であることを基本とした。観光と深く結びついている白川村の特質も考慮して業者による組合も広い意味での「まちづくり」団体に含めた。また、教育委員会主催の講座などは対象外とした。

調査時期は、2004年８月16日～31日、調査方法は郵送による質問紙法である。

回答数は32団体、回収率は58.2％であった。

（２）調査の構成

回答者　(1)　回答者氏名
　　(2)　回答者職名（団体内の役職）

１．基本属性
　(1)　団体名（正式名称、村内での愛称）
　(2)　所属人数（実働人数）
　(3)　活動目的
　(4)　活動内容主な活動場所（地区名）

２．設立の経緯
　(1)　設立時期
　(2)　設立の動機、きっかけ（F.A）

３．組織
　(1)　規約の有無
　(2)　会費の有無
　(3)　役員体制

４．メンバー
　(1)　メンバー層の構成（性別、年齢別、主な職業）
　(2)　参加の動機（地縁、あて職、趣味、問題意識ほか）

５．地域とのかかわり
　(1)　団体と地域住民との接点
　(2)　団体と行政との接点

６．運営上の課題
　(1)　現在、組織を運営していく上で課題となっていること
　(2)　活動を継続・発展させていくために、有用と考えられる支援など

７．白川村のこれから
　白川村が暮らしやすい村であるために必要なこと

４．調査結果

調査結果を報告する。なお、自由記述もすべて掲載しているが、固有名詞等は削除させていただいた。

（１）活動分野

今回、回答をいただいた32団体の内訳は、地域の活性化や町並み保存などの「まちづくり」活動が6団体、老人クラブ、民生委員児童委員協議会、食生活改善連絡協議会などの「健康・福祉」活動が6団体、児童・生徒らを対象にスポーツ活動の指導をしている「青少年スポーツ」活動が6団体、観光業、飲食店、森林業などによる「業者組合」が６団体、民謡や獅子舞保存などの「伝統文化保存」活動が5団体、民話をわかりやすくアレンジし方言を使った芝居や祭礼において演じられていた芝居を児童施設や小中学校、高齢者施設等で上演している「健康福祉・伝統文化」活動が2団体、観光関連活動ボランティアが1団体であった。

表１　活動分野の内訳　（団体）

活動分野	調査を依頼した団体数	回答のあった団体数	活動分野別回答率（%）
まちづくり	15	6	40.0
健康・福祉	9	6	66.7
青少年スポーツ	7	6	85.7
業者組合	9	6	66.7
伝統文化保存	10	5	50.0
健康福祉・伝統文化	2	2	100.0
観光案内	1	1	100.0
地縁組織	2	0	0
合計	55	32	58.2

回答団体の活動分野別内訳

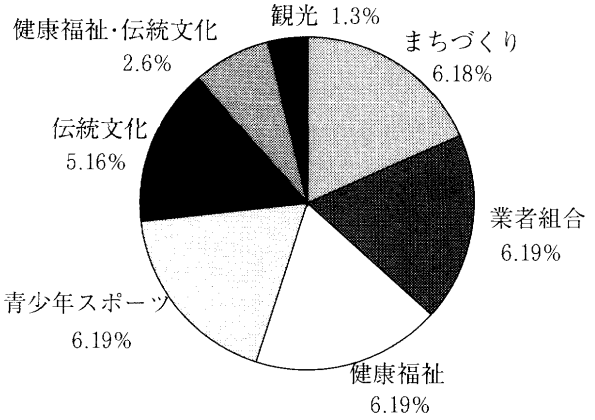

図２　回答のあった団体の活動分野別内訳

（２）主な活動場所

主な活動場所は、「主に村内で活動する」という団体が圧倒的に多く28団体（84.8%）、「村外にも出向いて活動をしている」団体が３団体（9.1%）、無回答が２団体（6.1%）であった。村内で活動している団体を詳しく見てみると、特定の活動場所がある団体が23団体、「村内全域」と回答した団体が３団体、「特に定めていない」と回答した団体が２団体あった。「特定の活動場所がある」と回答した団体のうち具体的な建物などの名称をあげた団体が10団体、「地区内、集落内」と回答した団体が13団体である。特定の建物名などをあげた団体は青少年スポーツ活動を中心に、練習や作業を行なう団体であり、伝統文化活動、まちづくりの活動を行なう団体は、「2.本調査の位置づけ」で紹介した６つのいずれかの地区を基盤として活動を展開している。

表２　主な活動場所

主な活動場所		団体数		内訳(%)
主に村内	特定の活動場所がある	23	28	71.9
	村内全域	3		9.4
	特に定めていない	2		6.2
村外にも出向く			3	9.4
無回答			1	3.1
合計			32	100.0

（３）所属している人数とメンバー構成

① 所属人数と常時活動している人数

所属人数が20人以下の団体が、全体の約4割を占めている。比較的小規模の団体が中心である。所属人数別の内訳は表３のとおりである。

団体に所属している人数の延べ数は約1,600人である。回答に○人～○人もしくは約△人というように曖昧な数値の団体が複数あり、「○人～○人」とした団体はその中間の数をとり、「約△人」とした団体はその数（△）をとり合計した。回答のあった団体には、単位クラブとその中央会が含まれている活動もあり、少なくとも400人程度は重複していることがわかるが、このことを考慮しても人口2,000人の村においてこの活動者数は多いと考えられる。しかも、今回の調査に回答いただけなかった団体のことも考えあわせると、複数の活動を行なっている人がかなりの数に昇ることが推測される。

また、「世帯単位で加入しているが会合などには原則として１人での参加」としている団体も複数あった。その場合も「１世帯」を「１人」として計算している。このことから、実働人数は更に多くなることが推測される。

このほかに、「所属人数と常時活動人数が異なるか」という質問にたいして「はい」と答えた団体が８団体あった。その理由としては「子どもは学校があるため平日の活動はできない」「加入者の高齢化が進んでおり、常時活動ができない人がいる」「若年層の参加率が悪い」「農作業の合間に活動しているので、時期に応じて変化する」「屋外での活動なので季節で変化する」などがあげられていた。

表３　所属人数

所属人数	団体数	内訳(%)
1人～20人	13	40.7
21人～40人	10	31.4
41人～60人	2	6.2
61人～80人	1	3.1
81人～100人	1	3.1
101人～120人	1	3.1
121人～140人	0	0
141人～160人	1	3.1
161人～180人	1	3.1
380人以上	1	3.1
無回答	1	3.1
合計	32	100.0

② 性別内訳

所属メンバーの性別について尋ねたところ、28団体か

ら回答があった。その内訳は、男性が595人（59.7%）、女性が402人（40.3%）である。

表４　所属メンバーの性別内訳

性　別	人　数	内訳(%)
男　性	595	59.7
女　性	402	40.3
合　計	997	100.0

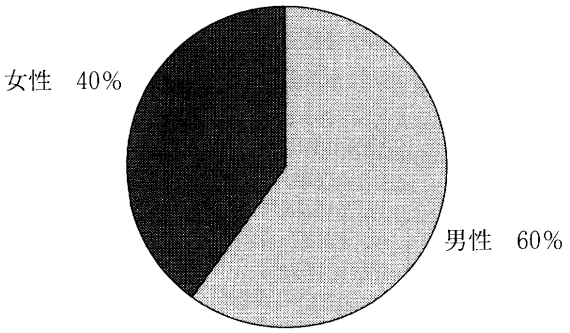

図３　所属メンバーの性別内訳

③ 年齢内訳

所属メンバーの性別について尋ねたところ、28団体から回答があった。上記②の質問に回答いただいた団体とは一部異なっているため、合計人数も異なっている。最も多かったのは70代の372人（27.3%）であった。３位までを高齢者世代が占めているが（２位　60代の206人（15.1%）、３位　80歳以上の172人（12.6%））これは、老人クラブなどの規模の大きな活動団体によるものである。20歳未満の参加が多い理由としては、青少年スポーツ活動と伝統芸能活動団体に小中学生世代の参加があることによるものである。

表５　所属人数

年　代	人数	内訳(%)	年　代	人数	内訳(%)
10歳未満	76	5.6	40代	124	9.1
10代	73	5.4	50代	119	8.7
20代	84	6.1	60代	206	15.1
30代	138	10.1	70代	372	27.3
			80歳以上	172	12.6
			合　計	1,364	100.0

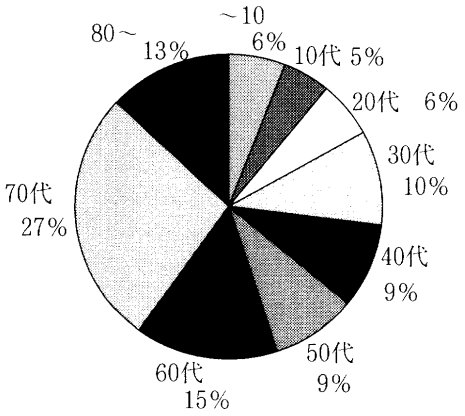

図４　所属メンバーの年齢別内訳

④ 主な職業

所属メンバーの主な職業について、自由記述で回答していただいた。26団体からの回答の内訳は以下のとおりである。最も多かった職業が「自営業」で16団体が「所属メンバーの主な職業」としてあげている。ついで「会社員」が15団体、「公務員」が８団体、「学生」が５団体である。このことから、現在、フルタイムで働いている世代が活動の主な担い手であることが伺える。

ただし、この質問では、それぞれの職業の人数は質問していないので、所属メンバーの職業の人数内訳が、必ずしもこの順位であるとは限らない。

表６　メンバーの主な職業

所属メンバーの主な職業	団体数（複数回答）
自営業（商店、観光サービス業、建設業、食品製造業、管理業など	16
会社員、サラリーマン	15
公務員（役場、警察、郵便局）	8
学生（小学生、中学生　含む）	5
主婦	4
シルバー世代（年金生活者　含む）	4
農業	3
団体職員（JA含む）	3
パートタイマー	2
土木作業員	2
僧侶	1
無職	1
合　　計	32

（４）設立の時期と動機

設立の時期については、白山国立公園として昇格し、また御母衣ダムが完成した1960年代と全国的に地域社会の中でのボランティア活動が注目を集めた時期である1980年代の創設が多い。白川村にあるものが観光資源とし

て見なおされた時期と重なるようにも考えられる。国の動向と関連があるものとしては、いくつかの団体は「法に定められているから」を創設の理由としている。「ふるさと創生資金」による助成を創設の理由としている団体もある。その一方で、老人クラブは古くからの高齢者の集まりとして意識されている様子で、1962年の法制定をほとんど意識していない。

教育、青少年スポーツ活動分野で、強い動機付けをするキーパーソンの存在を創設の理由にあげる団体もあった。

動機について

○　古くより愛好者により伝承してきましたが、昭和11年9月高山八幡宮大祭に出演以来、参加要請が出てきたので地域民の賛同を得て、白川村長を会長とする白川民謡保存会を結成して組織の強化を図ることとなった。

○　国の民生委員法に基づくものによる。

○　初代会長 大塚清市氏が白川民謡の存続を危ぶみ、同年代メンバー7名くらいで戦後絶えていた盆おどりを青年団を巻き込み復活、その後盆踊りの継承とまた民謡の伝承に頑張っているところです。（会長は現在3代目）

○　当時のことはわかりませんが、指導機関の助言と思われる。

○　上記の設立年月日は規約施行日であり、活動は古くから行われており不詳である。

○　この競技が好きでしたし、子どもたちの健全な精神と健康な体力づくりのために始める。

○　小学校勤務の先生の奥さんが児童教育に携わっており、白川在中にボランティア活動をされていた。その方が、白川村の子どもの為に何か続けていけることと

表7　設立の時期

設立された年代	団体数	内訳(%)	村の主なできごと（自然、産業、観光関係）
明治以前	2	6.3	
1931年～1940年	1	3.1	1935年、ドイツの建築家ブルーノ・タウト来村。 1939年、ブルーノ・タウト著「日本美の再発見」[22] 刊行。
1941年～1950年	2	6.3	1945年、敗戦。1948年、牧戸・鳩谷間の道路整備に伴い、白鳥から鳩谷まで省営バス（現：JRバス）が運行される。1948年、集中豪雨により鳩谷・荻町で山津波発生、各々家屋5戸・田畑流出埋没する。1949年、大郷地区全戸に電灯点灯。
1951年～1960年	1	3.1	1951年、平瀬鉱山が住友金属鉱山(株)の所有となり本格操業開始。1954年、椿原発電所が完成し、営業運転開始。同年、御母衣ダム建設により尾神・福島・秋町の各集落離村。1955年、鳩谷ダム建設により大牧・野谷・保木脇の各集落離村。同年、白山国定公園に指定される。1956年鳩谷発電所営業開始。1958年、牧地区商店街大火、家屋43戸全半焼（災害救助法発動・破壊消防法）
1961年～1970年	5	15.6	1961年、御母衣ダム運転開始。1962年、白山国定公園が国立公園に昇格。1966年、温泉保養地として親しまれてきた大白川温泉がダム建設に伴い水没となるため、平瀬まで温泉通湯に成功。1969年、日本ナショナルトラストが「白川郷合掌造り民家群」を保護対象に決定。
1971年～1980年	2	6.3	1971年、「旧遠山家民俗館」が国重要文化財指定。1973年、「白川郷合掌村」開村。1976年、国指定「荻町伝統的建築物群保存地区」選定。1977年、白山スーパー林道開通。
1981年～1990年	6	18.8	1981年、いわゆる「56豪雪」。最高積雪量450cm。航空自衛隊岐阜基地より隊員派遣。1989年、大白川に恐竜の足跡化石発見。
1991年～2000年	2	6.3	1992年、白川郷文化フォーラム」開催。1995年、「白川郷・五箇山の合掌造り集落」世界遺産登録。
161人～180人	5	15.6	
380人以上	2	6.3	
無回答	4	12.5	
合　計	32	100.0	

考えてくれたこと。

○　世界文化遺産登録等に伴う観光客増加で、案内希望者、団体等の要請と地域振興の上から村内融資の盛り上がりの中で発足。

○　中学生がなかなか部活動の練習ができない、活動日が決められているということで、他に練習をする方法としてクラブを設立したらどうかというのがきっかけです。

○　天下の奇祭どぶろく祭りには、境内の奉芸殿において昔から時代人情劇芝居が地元青年たちによって受け継がれてきたが、ここ10数年前から途絶えた状態であった。そこで、復活の発起を地元OBに話を持ちかけ、意欲のある者の集まりで一座を旗揚げしたのである（当時座員８名）。初舞台の演目は「白波五人男」と「古代からの民謡」を演じ、地元民からはなつかしさと祭りムード゛が高まったと盛況であった。観客の期待に沿うよう努力をしているが何かと練習時間がなく、昔とった杵柄で楽しんでやっている。その後、祭礼はもとより結婚式の披露宴の余興。

○　昨年（H15.8.1）発足、△△地区町並み環境整備部会、今年（H16.6.1）白川村景観条例に基づき、地区まちづくり協議会として認定される。

○　毎年、新しい人に伝承していく。踊り、唄、お囃子（三味線、太鼓、四ツ竹 等）。

表８　規約の有無

規約の有無	団体数	内訳(％)
ある	17	53.1
作成中	6	18.8
検討中	2	6.2
ない	4	12.5
無回答	3	9.4
合　計	32	100.0

（５）組織運営

① 規約の有無

半数以上の団体が、規約を持っており、2割強の団体が「作成中、検討中」である。「ない」と回答したのは同好会系活動団体と地縁関連団体である。

② 会費

半数の団体が会費を徴収している。会費を徴収していない団体は、謝礼や出演料などを受け取る活動を中心に行なっている団体で、材料費や交通費など活動諸費用に謝礼などを充てていることが多かった。

また、会費は全て「年会費」として徴収されており、その金額もおおむね3,000円以下である。

表９　会費の有無

規約の有無	団体数	内訳(％)
ある	16	50.0
入会費のみ徴収	1	3.1
必要に応じて徴収	2	6.3
ない	10	31.3
検討中	1	3.1
無回答	2	6.3
合　計	32	100.0

表10　会費の金額（全て年額）

規約の有無	団体数	内訳(％)
500円	1	5.9
1,000円	4	23.5
2,000円	3	17.6
1,000円～2,000円（年齢により異なる）	3	17.6
3,000円	3	17.6
5,000円（入会費）	1	5.9
6,000円	1	5.9
20,000円	1	5.9
合　計	17	100.0

③ 役員体制

約8割の団体が何らかの役員体制を敷いている。ただし、その仕組みは非常に多様である。「代表＋副代表」の組み合わせの団体が3団体、「代表＋役職」の組み合わせが2団体、「代表＋副代表＋役職」の組み合わせが5団体、「代表＋副代表＋複数の役職」という組み合わせが11団体、未記入が５団体である。

表11　役員の有無

規約の有無	団体数	内訳(％)
ある	26	81.3
ない	4	12.5
検討中	0	0
無回答	2	6.3
合　計	32	100.0

〈代表＋副代表〉

○ 会長１名、副会長１名

○ 会長、副会長

○ 会長１名、副会長２名

〈代表＋役職〉

○ 会長１名、会計１名

○ 会長、庶務係

〈代表＋副代表＋役職〉

○ 会長、副会長、会計

○ 組合長、副組合長、会計

○ 会長、副会長、連絡委員

○ 会長１名、副会長１名、連絡員１名

○ 会長１、副会長２、運営委員（組１人）８

〈代表＋副代表＋複数の役職〉

○ 組合長、事務局長、副組合長（７つ）、監査（２名）
○ 会長１名、副会長１名、会計１名、地区連絡員５名
○ 会長、副会長、書記、会計、指導者
○ 理事11名、監事２名（理事の中から組合長、副組合長、書記、会計が選ばれる）
○ 会長１名、副会長２名、理事６名、監事３名、書記２名、会計１名
○ 会長、副会長、書記、会計、監査員（各１名）
○ 会長１、副会長１、書記１、会計１、体育部長２（男女）、連絡員13、監事２
○ 会長１名、副会長２名、組長10名、監事２名、庶務会計１名
○ 団長、副団長、分団長、副分団長、部長、班長
○ 団長１名、部長１名、会計１名、指導員６名
○ 育成会長（父兄から選出）１名、会計（同様）１名、連絡員（同様）２名、監督１名、コーチ１名

（６）団体への参加動機

「所属メンバーの主な参加動機」について、あてはまるもの全てを選んでいただいたところ、理由として最も多かったものは「共通の問題意識があるから」で17団体であった。続いて「近隣の活動であるから」が15団体、「白川村が好きだから」が14団体、「仲のよい知人・友人に誘われたから」が12団体となっている。１位と４位は、ボランティア活動者の意識でも上位に入るものであるが、今回の対象団体の所属メンバーは、地域社会への帰属意識が高いことが伺える。一方で「関係機関に依頼されたから」5団体、「知人、友人に頼まれて仕方なく」2団体と、主体的とは言い難い理由も選ばれている。これらの意識の違いが日常における活動状況にも差異を生じさせているのか検証の必要があるだろう。

表12　メンバーの主な参加動機

所属メンバーの主な参加動機	回答のあった団体数（複数回答）
共通の問題意識があるから（福祉、環境、まちづくり、教育　ほか）	17
近隣の活動であるから	15
白川村が好きだから	14
仲のよい知人・友人に誘われたから	12
共通の趣味があるから	9
関係機関に依頼されたから	5
知人、友人に頼まれて仕方なく	2
その他	7
合　　計	81

その他の理由

○ △△区町並み環境整備部会発足にあたり、住民からの参加希望を取り構成
○ 白川村民の生命、財産を守るため
○ 融資を借りようとすると組合に加入しなければならない
○ やってみたかった。強くなりたい。
○ 強くなりたいから、楽しい会がたくさんあるから（クリスマス会、鏡開き、卒業生を送る会、合宿他）
○ 子どもたちの体力づくりや団体活動を通しての仲間づくり

自由記述

○ 民謡は遺伝性があると思える。できそうな人は加入してもらう。
○ 昔からの伝統芸能を守ろうとする心
○ 各家庭の家族の健康管理に勤めたいと云ふ意見もあった。

（７）地域住民との接点

「団体と地域住民との接点」についてたずねたところ、26団体から回答があった。最も多かったものは「文化・技術の継承」であり、14団体があげている。活動分野に関わらず、伝統を継承しているという誇りを伺うことができる。続いて「環境整備、環境美化」が7団体、「福祉活動」が6団体、「青少年育成、子どもたちとの関わり」に関することが4団体、その他が5団体であった。いずれも地域（地区）との深い関わりを感じさせる記述となっている。

記述内容

〈文化・技術の継承〉　※環境整備、福祉活動との重複あり

○ ものづくりを通して、文化の伝承や福祉活動にかかわっています。
○ ご老人からはなつかしい話として喜ばれている（文化の継承）　子どもたちへは白川村のよさを伝えていくことができる。
○ 文化とくらしを守る。合掌造り保存の厳しさ、村人の姿、心意気等を正しく観光客に理解いただく。
○ 環境整備、文化の継承。
○ 文化の継承に貢献（同記述 3団体）。
○ 文化の継承「世界遺産保存に協力」　環境整備（合掌造りの外観）。
○ 祭礼、お盆の地域行事に協力している。子どもの運動会にも取り入れてもらい、当日応援に行きます。
○ 数百年以上も昔、平家の落武者伝説に源流があるとされている白川民謡の価値を早くから理解し保存と普及に努力を注いできた先人たちの貴重な遺産であります。大正中期頃から地域の愛好者を募ってまだ整っていない全く素朴な唄・麻衣の順序やしらべを

研究し、これを集大成したものと思われます。喜びを唄い上げることは勿論のこと、悲しい時、苦しい時にも何時も心のよりどころとして私たちを力づけてくれますし、脈打つ躍動感は私たちの心に深い感動を与えてくれます。このすばらしい伝統芸能を郷土の誇りとして文化の継承に更に努力していかねばならない責務を痛感しています。

○ 自治会のメンバー、文化の継承として祭り。
○ 伝統芸能の継承に貢献している、福祉活動にも一部貢献。

〈環境整備、環境美化〉　※福祉活動、伝統文化の継承との重複あり

○ 環境整備
○ 環境整備に少し貢献している。
○ 村内美化運動に参加、わら加工技術の継承。
○ 環境整備の貢献、住民対象の福祉活動、健康づくり。
○ 環境整備、福祉活動。

〈福祉活動〉

○ 住民対象の福祉の活動。
○ 住民対象の福祉活動として、住民検診の結果による生活予防を推進を進めるため。

〈青少年育成、子どもたちとの関わり〉

○ 子どもの育成に貢献している。
○ 少年のスポーツチームとして、住民とのつながりがある。

〈その他〉

○ 雪国でスキー場が村内にあるという地域性を生かした活動をしている。
○ 根強い村民の信頼を持っている。
○ 一人でも交通事故にあわない、あわせない。
○ 観光関連団体との交流。
○ 地域住民の方とどのような接点があるかわかりませんが、各営業者の方々に寄付等をお願いに回っています。

（８）行政機関、行政計画との関わり

「行政機関・行政計画との関わり」について尋ねたところ、25団体から回答があった。そのうち行政との関わりが「ない」と答えた団体が２団体である。「関わり」として最も多いものが「補助金」で、11団体が回答している。「イベントや事業などへの協力」が8団体、このうち3団体が行政計画への参加、実施をあげている。このほか、村行政のみでなく郡内の町村とのつながりをあげた団体が１団体、団体そのものが隣接村との合同組合であることから白川村のみとの協力体制はとりづらいとした団体が1団体あった。

記述内容

〈補助金関連〉

○ 小さな機関ですので補助金を受けています。
○ 村のイベント等に依頼され、協力している。村外にも村より依頼されて出演しています。年間２万円の補助金を受けている。
○ 補助金をもらっている。年間５万円程度。行政も昔からの芸能を守る心あり（県民無形文化財）。
○ 後継者の育成・普及や諸活動の経費の一部として村補助金を受けている。
○ 補助金を受けている。
○ 補助金を受けている。行事の手伝い。
○ 国、県、村からの団体である。補助金を受けている。
○ 補助金は平成13年～15年の３年間受けた。理由は役場の村おこし事業の対象として認められたから。それ以外は基本的にボランティアです。
○ 補助金を受けている（同記述 2団体）。
○ 補助金及び備品購入等における協力体制。

〈イベントや事業などへの協力〉

○ 商工観光課との密接な関係のもとに、村づくりへの貢献に努める。
○ 白川村景観づくりに協力。
○ 行政とは直接は昔は屋根葺き替え等の計画書の作成を行っていたが、今は別の団体の方に移っているので技術伝承が主である。
○ イベント等による獅子舞の公演等。
○ 住民福祉の協力（村計画、施策づくり等に参加協力）。
○ 行政計画を実施する。
○ 道の駅周辺総合開発事業（案）の取り組み。
○ 道徳教育の協力、公共施設の維持管理に協力。

〈その他〉

○ 隣接村との合同組合なので単体行政とでは行動が困難。
○ 郡内の町村とのつながり。
○ 行政にはなるべく迷惑をかけずに運営をしていきます。これから先もこの方針でやっていきたいと思っていますが、行政には資金難でこれ以上無理ですとお願いすることはしてあります。
○ 団体選手やインターハイ代表選手が多く育った。そのため岐阜県の連盟から注目され、現在H24年冬季岐阜国体に向けて岐阜県ジュニア強化コーチ主任になった。県内ジュニア育成もやっている。

（９）団体の運営課題と対策

① 現在の運営課題

「団体の運営上の課題」について尋ねたところ、２８の団体から回答あり、そのうち「なし」との回答が１団体あった。課題は、所属メンバーの高齢化、若年層の加入率低下、材料の確保、意識の変化、環境の変化、周囲からの理解不足、活動資金の確保、合併によるこれまでの事業存続に対する不安などが出されている。「メンバーの高齢化、若年層の加入率低下」は、主たる活動者が30代の団体から70代の団体まで、幅広い層から出されてお

り普遍的な課題と言える。

記述内容

〈後継者の確保、育成〉

○ 若者の減少と高齢化対策。後継者の確保が必要
○ 若い人たちが少なく、後継者がなかなかいない。体力もいる。
○ 20歳代のメンバーを仲間に加入問題
○ 高齢者が多いので無理なことがさせられない
○ 70歳以下の参加が少ない
○ 60歳代の参加が少なく困っている。
○ 住民、会員の参加が少ない
○ 三味線のできる人が育たないので心配している。現在は親子三世代で守っている。今ひとり育成中
○ 若い人が近代的音楽に心とられ、古い芸能を残す心
○ 技芸の経年による変化→本来の形にもどす
○ 地区によっては長い間やってもらえないところがある。
○ いつまでやるのだろうという不安と疑問、メンバーの意識のうすれ、家族の反対　など
○ メンバーが特定化されがち。(幅広い範囲での取り組み努力と新会員への加入呼びかけ)
○ 高齢者の方には会の存在がご理解いただけるようになりましたが、若年の人たちに推進できることを望みます。
○ 指導者の確保（若手)。
○ 経験者が少なく、小さい子に教えるのはなかなか難しい。

〈材料の確保〉

○ 萱の確保が難しい（特に小かや）　若い人に萱の刈り方を伝承する必要がある。

〈活動時間、資金の不足〉

○ 座員はそれぞれ仕事を持っている関係、練習が充分にできず本番までに苦労した。貸衣装を借りるため衣装代に経費がかかる。座員全員やる気はあるのだが、継続していくには何かと資金が伴い、現在資金がない。練習する場合、近所に迷惑がかかることがあり、練習場所がない。
○ 組合組織で非営利団体と言われるが、赤字ではやっていけない。
○ チーム以外の選手（県内外の子どもから一般の選手）がたくさん参加するようになったので機材の破損が激しく会費をとっていないので困る。

〈活動のメリットの創出、アピール〉

○ 組合加入のメリットが人によって少なく、組織力に欠ける。荘川村との合同なため、組合員も自由に動かせない。
○ いかにお客さんの目を引いて立ち寄って下さるかということが最大の課題です。

〈その他〉

○ 活動には協力であるが、訓練が3割のメンバーがきらいだ。
○ 子どもの数が少ないのと、暑いところ、外での運動、団体で遊ぶことのできない子どもが多く、加入生徒が少ない。
○ 大野郡が高山市と合併したら、白川村だけになりますので、中体連の大会に参加できなくなる（白川中学校にはその協議の部活動がないので)。
○ 会の運営には問題はないが、これから先、高齢化するなかで独居世帯が増えそうで支援対策が課題となろう。
○ 難しい事が山積しています。

② 対策

上記、運営上の課題に対して「どのような対策を講じているのか」について尋ねたところ、２２の団体から回答があった。課題に対して対策が未記入の団体は、対策を講じあぐねていると解釈してよいのではないか。対策としては、運営形態を柔軟に行なう、村内の学校や団体との交流、住民への働きかけ（呼びかけ）などがあげられるが、一方で諦めを強く感じる回答が目立った。

記述内容

○ 全員主婦の立場もあるので、家族の理解が不可欠。時間を守るなど（練習）　家族に心配をかけない。
○ 20名以上の団体からの申し込みには養成を含め2名で案内対応。
○ 青年団との交流（数人、委員会に加入)、まちづくりかわら版の発行、村広報に掲載。
○ 教育委員会の事業に兼ね合わせやがて巣立ち行く中学生と対象に料理教室を催し食の大切さを推進して行きたいと計画を進めています。
○ 中学生の萱刈りに技術指導。
○ 児童・生徒に運動会、芸能大会に参加してもらう。
○ 伝統文化保存伝承の大切さを強調して一層の理解・協力をお願いしている。
○ 30代～40代の人で、体力のある人材を入会している。
○ 若者で加入したい希望の者が多くある中で、やる気のあるものは加入してもらい、どんどん中心的な役割を与え、満足を持たせる→継続につなげる。
○ OBへの指導依頼。
○ 年に数回、ソフト面から参加してもらい、導いています。
○ サークル活動の項目を設ける。
○ 若者、高齢者の語り合う場を作り、今、昔の差を語り合い生活に活かしたい。
○ 役員会において、参加者を多くするための方策を毎回話題にしている
○ 順番にやっている。
○ 特に対策はない。強制力を持ったとしても本当の改善にはならない。日本のシステムが変わらないと困

難？
○ 特には行っていない。やる気のない子どもでは。
○ 少しでも楽しく、最初は遊びといった感じで好きになるように教える。
○ 今年までは何とか参加させていただいていますが、来年度からは学校において部活動を設立しないと参加できないとのことで、いろいろ協議していただき設立を実現させていただいたのですが、部員はゼロです。子どもたちに聞くと「やりたいが入部すると今までやってきた分が部活動として活動できなくなる」とのことで、また課題となっています。
○ 地域への協力の呼びかけ。
○ 活動場所で、多くの方が通る場所にカンパのための瓶を置いてある。

（10）活動を継続・発展させるために望まれる支援

「活動を継続・発展させていくために有用と考えられる支援方策などがあれば教えていただきたい」と質問したところ、16団体から回答があった。そのうち１団体は「なし」と記述しているが、この団体は運営上の課題に対しても「なし」と記述している。自分たちの活動の内容や質を高め、そのことで周囲に働きかける、メンバーの意識向上、運営形態の改善などが中心である。中には、永続させるつもりはない、と明確に表明している団体もあった。「行政からの情報公開」「補助」などのほかは、支援方策は示されていない。

記述内容

○ 私たちはより良いものを作って（真心）お客さんに喜ばれるということが今後の発展につながっていくと思っております。
○ 白川村では幸いに行政（住民福祉課）から事業に関わる材料費を補助していただいていますので、今後も会員の無理のないよう継続していくつもりです。
○ 行政側の積極的支援策、会員自身の自覚高揚対策。
○ 行政からの一層の情報公開。
○ 若い世代に「世界遺産の保全」の大切さを伝えるため様々な方法で特に体験により伝える努力をしている。
○ 一人でも多く、若い人に参加してもらう。機会あるごとにお願いしている。
○ 続行すること。
○ 祭礼だけでなく、村内で獅子、その他の保存会など披露できれば、この活動の継続・発展につながると思う。
○ どんな事でも話し合いができる場を設ける。
○ 指導者の養成、連合会活性塾。
○ 世代交代が進むこと。
○ まず、親が考える必要があるのではないか。
○ ６年間頑張ってやっていて、中学3年間、このスポーツが中断されることが子どもたち、指導者もつらいことである。子どもに選択をさせるようにしたいと思っています。その為に、一つの「部」がなくなることも仕方ないと思います。うまく言葉にできなくてすみません。
○ チーム全体が派手にならないようにする。父兄にお金を使わせないよう使えるものは長く使用する。ムダなものは購入しない。
○ 正直いうと、永遠に続けるつもりはありません。ボランティアなのでできる年もあればやらない年もあります。ちなみに平成16年２月公演は中止しました。

（11）白川村が暮らしやすい村であるために必要なこと

団体の活動以外の生活環境に対して、どのように目を向けているか探るため「白川村が暮らしやすいために必要だと思うこと」について質問したところ、24団体から回答があった。環境整備、若者の定着（産業の振興、就労先の確保）と同時に自然環境の保全などの意見が中心である。そのためには、結の心と取り戻す、住民の責任ある行動とまちづくりへの参加などの意見が出ている。「貧しくとも心の豊かな村」という指摘にあるとおり、現状を変える勇気がなければできないことが多く提案されている。

記述内容

〈村民同士の助け合い、村民の自覚による村づくり〉
○ 互いに助け合い信頼を持ち生活する。
○ 白川村の発展には各々責任のある行動をとり、更によく語り合うことが大切だと考える。
○ 結の心で力をあわせていくこと。
○ 本当の結の心を取り戻してほしい。
○ 住民、行政とのパイプ役として努めていく。
○ 住民の皆さんが健康第一に考え、自給自足が必要と思います。
○ 村内のお金を村外では使わない。できるだけ村内で購入できるものは村内で購入する。村の子どもにお金を多く使う（スポーツ施設や備品など）。

〈白川村の豊かな自然を尊重する〉
○ 自然をたくさん残して生きたいとおもっています。
○ 観光による自然破壊を防ぎ、豊かな自然を後世に残すこと。

〈新たな産業の創出、経済の発展〉
○ 産業育成をして若者が安心して住める村にすることが大切。
○ 経済的に暮らせる村であること。

〈観光事業の強化〉
○ 当地域には温泉があり、数軒の旅館があります。観光地として売り出しに頑張っています。応援をしていきたい。
○ 一年間を通してお客様が来ることが必要。現在のピー

クと暇なときの差は激しく、働き手の手配等営業的に難しい。このまま、入村規制があれば、立地場所によって苦境に立つ業者は増加が予想される。商売環境規制をもっとトータルで考えられるようにならないと、意見の集約は難しいのでは…。

〈観光化への懸念〉

○ 現在、観光客が過剰であり、村人も目先しか見えないようになってきた。貧しくとも心豊かな村がよい。現状では観光客を減らす対策も必要ではないか。

○ 昔からの結も必要だし、観光化しすぎて集団の行事（村民運動会等）ができない。個々の生活になっている。

○ 世界遺産指定後は暮らしやすくなったか疑問であるが、住民の意見を尊重しながら、住民が住みやすい対策をつくる、考える。

○ 芸能に関連することしかわからないので、適切な提言ができませんが、若者たちが希望をもって生活できる。環境づくりが望ましいと思います。

○ 白川村は観光地ですので、どう観光客と関わりをもっていくか、最小限のマナーを観光客に持っていただきたいし、それに対し、白川村民ももっと白川にきてよかったというように心がけなければならないのではないかと思います。

〈道路などの環境整備〉

○ なを一層の環境整備。

○ 国道の整備。

○ 冬期間の環境整備

〈行政の役割〉

○ 行政の広報活動の積極的取り組み。

○ 徹底した行政指導。

〈その他〉

○ 模索中。

(12) 住民がまちづくりに参画するための提言など

団体に限らず「住民がまちづくりに参画するための提案などあれば、自由に記述していただきたい」という質問に対しては、9団体から回答があった。やはり抽象的な意見が中心となるが、「白川村の独自性を守る」「住民やボランティア活動者の意見を反映させる」という意見がだされている。

記述内容

○ 大所高所に立脚して考えてください。

○ ボランティア活動、意見反映の場を設ける（各区、各組合単位、各種団体）。

○ 文化を大切に守り、継承する。地域の名所等（文化財）の周遊マップを作成するとよい。

○ ◎◎地区においては山村を守り、都市化しないことが大切（世界文化遺産）。

○ 自治会への積極的に参加、話し合いした内容を提案する。

○ □□地区には、開発委員会が設置されていて計画に沿って運営している。

○ 人生経験豊かな老人の活用。

○ 何が白川村の生命線なのか？　しっかり見ていくべき！　営業者も迎える側の代表としてしっかりとサービスを行うべき！　「100年前の白川村再現」ではなく、「100年後の白川村はどうあるべきか？」と視点を変えていくべきではないか？。

○ 私の住む△△地区では町づくり委員会を設立し頑張っています。協力できることは参加につとめたいと思っています。

5．考察

（1）調査の意義

白川村で行政の各部署や団体それぞれで村内の活動を把握していても全体をとりまとめたものはなく、また、活動内容や組織に関するアンケート等は実施したことがないという。その意味においても、今回の調査は有意義な作業であったと考えられる。

調査の回収率は58.2%ということで、調査を依頼した団体の約6割の団体から回答をいただいた。調査時期が、夏休み後半という、観光業の方にとっては繁忙期であったことも回答率を低くする要因であったかもしれない。調査に御協力いただくことができなかった理由については、個別にインタビューの機会を得るなどして引き続き検証を試みたい。

（2）住民活動団体の現状

住民団体の活動内容は、調査依頼団体の母数の数値を見るべきと考えられるが、「伝統文化保存」「まちづくり」「観光」関連の団体が中心である。住民の関心事であり、誇りとしている部分であると考えられる。

主な活動場所は村内、それも地区公民館や神社、学校施設など特定の活動拠点がある団体が多い。枠外の記述からも、住んでいる地区との密接な関わりを伺うことができた。

住民団体に所属している人数の延べ数は約1,600人である。2003（平成13）年の「社会生活基本調査」によると、ボランティア活動の活動率は28.9%であった[23]。複数の団体に所属する人の存在を踏まえても、人口2,000人の村においてこの活動者数は非常に多いと言える。

（3）住民活動団体の担い手

調査に協力していただいた団体の約2／3が40人以下の所属人数であったことからも、「メンバー全員の顔が見える関係」規模の団体が中心である。

性別による内訳は、男性が約6割、女性が約4割と、男性の参加が多い。全国社会福祉協議会による社会福祉協議会登録ボランティアを対象とした調査[24]では、活動

者の内訳が男性27.1%、女性72.7%、無回答0.2%であった。また、2003（平成13）年の「社会生活基本調査」[25]によると男性の中でボランティア活動をした人の割合は26.6%、女性の中では30.1%であった。「活動者数」は延べ人数であるのことを考えても、ボランティア活動には男性より女性の参加率が高いという全国的な傾向がある中で、白川村において住民の主体的な活動に男性がより多く関わっている点は特徴として考えられる。

白川村では、20歳代でやや少ないものの、年代別の参加者数は平均的である。単純な比較にはならないが、2003（平成13）年の「社会生活基本調査」[26]によると、ボランティア活動を行なっている人の割合を年代別に見ると、活動者数が最も多い年代は40代前半、続いて30歳後半、40代後半となっている。これに対して、活動者の最も少ない年代は20代後半、続いて20代前半、10代後半となっている。40代前半と20代後半には20.1ポイントもの開きがある。各年代が平均して参加していることは、白川村の大きな特徴といってよい。

主な担い手は、「会社員」「公務員」「自営業」など、現在フルタイムで働いている世代である。調査の対象に業者組合を含めたことも理由にあると考えられるが、全国社会福祉協議会による社会福祉協議会登録ボランティアを対象とした調査[27]では、ボランティア活動者の職業で最も多くを占めるのは「主婦（仕事を持っていない人）」38.1%、次いで「定年退職後」24.5%、「企業・官公庁、自治体の職員」15.1%、「自営業」9.6%、「パート・アルバイト」9.0%、「学生」1.4%であったことを考えると、白川村の壮年世代は、まちづくりや伝統文化保存活動にも高い関心を抱き活動に参加していることが伺える。

「所属メンバーの主な参加動機」については、最も多かったものは「共通の問題意識があるから」、続いて「近隣の活動であるから」、「白川村が好きだから」、「仲のよい知人・友人に誘われたから」であった。1位と4位は、ボランティア活動者の意識でも上位に入るものであるが、今回の対象団体の所属メンバーは、地域社会への帰属意識が高いことが伺える。一方で、主体的とは言い難い理由も選ばれている。これらの意識の違いが日常における活動状況にも差異を生じさせているのか検証の必要があるだろう。

（4）設立の時期

設立の時期については、白川村にあるものが観光資源として見なおされた時期（昭和40年代）と、全国的にボランティア活動が注目されるようになった時期（昭和50年代）に創設された団体が多かった。「昔から活動していて不明」、「明治以前」と回答があったことには驚かされた。伝統文化保存関連の団体は、大正から昭和にかけての「新民謡運動」の時期[28]に多く設立されたことを予測していたのであるが、白川村においては昭和40年代を中心に設立されている。ただし、民謡や獅子舞などは遥か昔から集落ごとに継承されており、「保存会」「協議会」として活動を始めた時期が昭和に入ってからということであり、老人クラブ同様、「親から子、子から孫」という伝承を感じさせる記述が多かった。

（5）組織

半数以上の団体が、規約を持っており、2割強の団体が「作成中、検討中」である。「ない」と回答したのは同好会系活動と地縁関連団体である。そして、半数の団体が会費を徴収している。会費を徴収していない団体は、謝礼や出演料などを受け取る活動を中心に行なっている団体で、材料費や交通費など活動諸費用に謝礼などを充てていることが多かった。また、会費は全て「年会費」として徴収されており、その金額もおおむね3,000円以下である。約8割の団体が何らかの役員体制を敷いている。ただし、その仕組みは非常に多様である。

（6）地域社会・行政との関わり

「団体と地域住民との接点」については、最も多かったものは「文化・技術の継承」、続いて「環境整備、環境美化」、「福祉活動」、「青少年育成、子どもたちとの関わり」、「ものづくり」であった。活動分野に関わらず、伝統を継承しているという誇りを伺うことができ、（地区）との深い関わりが感じられる。

「行政機関・行政計画との関わり」については、最も多いものが「補助金」、続いて「イベントや事業などへの協力」であった。村行政のみでなく郡内の町村とのつながりをあげた団体が1団体、団体そのものが隣接村との合同組合であることから白川村のみとの協力体制はとりづらいとした団体が1団体あった。白川村は、隣接している荘川村との関わりが深く、住民の生活形態も共通点が多い。また、郡内の町村全体が小規模であったことから、これまでも共同して実施する事業が多かった。合併後、住民活動にも大きな影響があることが懸念される。

（7）運営上の課題と対策、支援

「団体の運営上の課題」は多くの団体が抱えており、その内容は所属メンバーの高齢化、若年層の加入率低下、材料の確保、意識の変化、環境の変化、周囲からの理解不足、活動資金の確保、合併によりこれまでの事業存続に対する不安などである。メンバーの高齢化、若年層の加入率低下は、主たる活動者が30代の団体から70代の団体まで、幅広い層から出されている。ここで出された課題は、飯尾によるボランティアグループ調査結果[29]とも共通する点が多い。

上記、運営上の課題に対して「どのような対策を講じているのか」について尋ねたところ、22の団体から回答があった。課題に対して対策が未記入の団体は、対策を講じあぐねていると解釈してよいのではないか。対策としては、運営形態を柔軟に行なう、村内の学校や団体と

の交流、住民への働きかけ（呼びかけ）などがあげられるが、一方で諦めを強く感じる回答が目立った。飯尾は先にあげた調査において、ボランティアグループは「リーダーを中心として気心が通じた人達が集まり核を形成し、やがて口コミで友達を誘いグループを形成していく。そこには『人間の輪』ともいうべき強い人間関係が絆になっていることが多い。この人間関係は一端形ができてしまうと、外部に対して閉鎖的になりがちである。本人たちが意識するとしないとに拘らず、外から入ろうとした場合、グループの雰囲気に馴染むことが容易でないことは簡単に推測できる」[30] と指摘している。この点に関する認識を当事者が持つことで、かなり解決できる課題ではないだろうか。

「活動を継続・発展させていくために有用と考えられる支援方策」は、自分たちの活動の内容や質を高め、そのことで周囲に働きかける、メンバーの意識向上、運営形態の改善などが中心で「支援方策」はほとんど示されていない。「支援」する主体は行政を想定しており、情報公開、補助金支援である。中には、永続させるつもりはない、と明確に表明している団体もあった。ボランティアグループの持つ特性を考えると、この視点は非常に重要である。しかし、「伝えること」が目的である伝統芸能を継承している団体にとっては、このようにはいかないだろう。ややもすると精神論に傾いている傾向がある。「得たい支援」「得られる支援」の情報収集や検討が、もっとなされてもよいのではないかと考える。

（８）生活環境に対する意識

白川村が暮らしやすいために必要だと思うことについては、環境整備、若者の定着（産業の振興、就労先の確保）と同時に自然環境の保全などの意見が中心である。そのためには、結の心と取り戻す、住民の責任ある行動とまちづくりへの参加などの意見が出ている。白川村はダムや観光が主産業であり、雇用の創出にも役立っている。しかし、開発が進み、観光客が急激に増加することで周辺の自然環境、住環境は大きく変化をしている。環境の保全と雇用の創出の両立は、村の大きな課題である。そのなかで「観光客にも自覚を促す」という意見が印象的であった。「貧しくとも心の豊かな村」という指摘にあるとおり、現状を変える勇気がなければできないことが多く出されている。自分たちの暮らしをかなり客観視していることが伺える。

住民がまちづくりに参画するための提案としては、抽象的な意見が中心となるが、「白川村の独自性を守る」「住民やボランティア活動者の意見を反映させる」という意見がだされている。

６．まとめと今後の課題

今回の調査を通じて、白川村で住民活動団体に参加している人たちは、男性、現在もフルタイムで働いている人たちが中心ではあるが、すべての年代層から参加があり、自分の生まれた村、居住する村に強い誇りと愛着を抱いており、住民活動の動機ともなっていることがわかった。地域社会への帰属意識や愛郷心と、住民活動への参加には密接な関係があることが推測される。

ここでいう郷土とは、村というよりむしろ、日常の生活単位である「地区」や「集落」である。所属するメンバー全員を見渡すことができる範囲であるからこそ、より強く、愛着と集団への責任、参加意識が育まれるのかもしれない。そして白川村の地区活動の中心には、古くから伝えられてきた神事芸能がある。

元来、神事祭礼は人々がよりよい暮らしを祈るためのものであり、福祉の思想と一致する部分が多い。河畠は、人々が暮らしの中に営んできた福祉思想が「暮らしをよくする」ための様々な文化的営みが「民俗」という形をとって残されてきている」として、祭礼、民俗芸能をあげている[31]。「町や村で行われている祭礼の源をたどれば、多くは五穀豊穣の願いであり、稲作中心の式の儀礼であることがわかる。…（中略）…こうした願いは民俗芸能という形を通して、地域住民によって集団的・具体的に表現されてきた。…（中略）…太古から社会の成員としての人間は、自然とのふれ合いの中で福祉の思想を展開していたのであり、それを文化的営みを通して共通の認識として確認し合ってきた」という。「暮らしをよくする」という意味での福祉の思想はムラ社会の中に確かに存在してきたし、現在も受け継がれている。しかし、やはりそれは「全体」の安定であって、いわゆるマイノリティの幸せ追及ではない。むしろ、全体のためには少数派の人びと、労働力として価値のない人びとは切り捨てられる社会であったろう。小規模な集団全体を重んじる伝統的な村落共同体が持つ特性は、福祉コミュニティと相反する部分を併せ持っている可能性がある。

よい意味で「助け合い」「自分たちの暮らしは自分たちで守る」という意識が濃厚に残っている伝統的農村部においては、住民活動を促進するというより、その活動の輪のなかにどれだけマイノリティな当事者が参画できるかということが最大の課題ではないだろうか。今回の調査では、この点に関する検証ができなかった。

マイノリティ層のなかには、外部からの移入者、いわゆる新参者も含まれるだろう。何代にもわたり続いた家系の人がある一定の年齢を迎えてから中途障害者となる場合と、その家に嫁いだ女性の、どちらが発言権が少ないだろうか。近年では、「老後を自然豊かな環境で」という考えの定年退職後の夫婦や、農業やペンション経営等に夢を抱く若者夫婦の移住も注目を集めている。このような動きは、過疎化に歯止めをかけるものとしての期待も集まっており、補助金を出したり家や土地を安価に提供する自治体もあるが[32]、新たしく移入してきた家庭がコミュニティの中で発言権を得るまでには相当の時間と労力が必要となる。長い間、我慢を強いられることも

あるだろうし、場合によっては、「そこまでして交流を持つ必要はない」と考える家庭も出てくるだろう。新旧の住民の感情的対立は新しい問題ではないが、過疎化が進む農山村においては重要な課題として認識されるべきであろう。

今後は、今回の調査を踏まえ、村落共同体において住民主体の活動を担ってきた人たちの在住年数、障害の有無などの詳細な属性、コミュニティから排除されていると考えられる人たちの属性などについて白川村を中心に調査を行ない、山間地の村落共同体における住民の社会参加の課題について考察していきたいと考えている。

最後に、この調査に御協力を頂いた住民活動団体のみなさま、白川村役場村民課村民福祉係 古田直樹氏、総務課環境計画係 岩本一也氏をはじめとする白川村役場のみなさま、白川村社会福祉協議会 南秀彦氏をはじめとする白川村社会福祉協議会のみなさまに、心より感謝申し上げます。

注

[1] 上野谷加代子「福祉コミュニティ」庄司洋子、木下康仁、武川正吾、藤村正之 編著『福祉社会辞典』弘文堂、1999年5月

[2] 濱野一郎「コミュニティワークの現代的傾向」濱野一郎・野口定久・柴田謙治 編著『コミュニティワークの理論と実践を学ぶ』みらい、2004年、P.17

[3] 奥田道大・和田清美 編著『第二版 福祉コミュニティ論』学文社、2003年

[4] 越智 昇「新しい共同社会としての福祉コミュニティ」奥田道大・和田清美 編著『第二版 福祉コミュニティ論』学文社、2003年、p. 220

[5] 前掲書、p. 222　また、越智は、「私的な定義」と称した理由について、「新たしい共同社会として福祉コミュニティをとらえつつも、これに対する明確な定義をためらうほかない」としている。

[6] 前出、濱野一郎「コミュニティワークの現代的傾向」、P.18

[7] 福武 直「日本農村社会論」第三章 村落社会の構造『福武 直 著作集 第8巻 日本農村社会論・現代日本社会論』東京大学出版、1976年、P.100

[8] 前掲書

[9] 白川村史編さん委員会 編集『新編 白川村史 中巻』1998年、白川村　P.455 図1「計画における地域区分」に筆者加筆。

[10] 「第五次総合計画 計画書」などにも“地域コミュニティ”として56の活動団体が紹介されている。白川村役場 企画・編集『日本一美しい村つくらまいか 白川村第五次総合計画』2001年4月、白川村

[11] 岐阜地方気象台のデータによると、冬季の積雪量は1983年～2000年の18年間の平均が178cmである。近年では、2004年2月に226cmの積雪が観測されている。
岐阜地方気象台ホームページ、電子閲覧室データより（白川村「平均積雪量」「極値」）アドレス：http://www.tokyo-jma.go.jp/home/gifu/

[12] 岐阜県：飛騨市、大野郡清見村、同 荘川村（1市2村）、富山県：東礪波郡平村、同 上平村、同 利賀村（3村）、石川県：石川郡吉野谷村、同 尾口村、同 白峰村（3村）

[13] 飛騨市：2004(平成16)年2月1日に、旧古川町、旧河合村、旧宮川村、旧神岡町の2町2村の合併により誕生。総面積792.31平方キロ、人口29,892人。
高山市：2005年2月1日に大野郡丹生川村、清見村、荘川村、宮村、久々野町、朝日村、高根村、吉城郡国府町、上宝村の2町7村が高山市に編入し、新市として誕生。総面積2179.35平方キロ、人口96,316人。
南砺市：2004年11月1日に東礪波郡城端町、平村、上平村、利賀村、井波町、井口村、福野町、西礪波郡福光町4町4村の合併により誕生。総面積668.86平方キロ、人口59,385人。
白山市：2005年2月1日に松任市、石川郡美川町、鶴来町、河内村、吉野谷村、鳥越村、尾口村、白峰村の1市2町5村の合併により誕生。総面積755.17平方キロ、人口111,893人。
※ 下線は白川村に隣接している（または合併前に隣接していた）町村。上記の人口は、国土地理協会発行「平成16年度版 住民基本台帳人口要覧」によるもので、2004（平成16）年3月31日現在のものである。

[14] 2004年現在、横這い傾向である。

[15] 厚生労働省資料「第2表 市区町村別合計特殊出生率・標準化死亡比（平成10年～平成14年）」より。厚生労働省ホームページ：http://www.mhlw.go.jp/index.html

[16] 1995年12月、ドイツ ベルリンで開催されたユネスコの第19回世界遺産委員会において「白川郷・五箇山の合掌造り集落」が世界文化遺産として登録されることが決定した。具体的には、白川村荻町地区、平村あいのくら相倉(あいのくら)地区、上平村菅沼地区。現在も人が生活している建物が指定されたこと、特定の建築物というよりも「集落」という生活全体が指定されたことが注目されている。

[17] 平成12年度　国勢調査資料より

[18] 「財団法人 世界遺産白川郷合掌造り保存財団」1997（平成9）年3月に設立。白川村荻町伝統的建造物群保存地区保存条例（昭和51年白川村条例第15号）に基づき、世界遺産に登録された白川村荻町伝統的建造物群保存地区とそれらをとりまく地域の環境を保全する

とともに、住民の生活環境を向上させることにより、世界遺産集落の価値を永く後世に継承し、もってわが国の文化の向上と白川村の振興発展に寄与することを目的に活動している。

[19] 白川村役場 企画・編集『白川村第五次総合計画 2001～2011』白川村、2001年4月、P.32

[20] 「白川村村政要覧」白川村役場、1997年

[21] 前掲書、P.69

[22] ブルーノ・タウト(Bruno Taut, 1880-1938) 著・篠田英雄 訳『日本美の再発見』、岩波書店、1939年
『日本美の再発見』はタウトの論文、日記集である。ここに収められている論文「日本建築の基礎」のなかで、合掌家屋の美と合理性について、伊勢神宮や法隆寺、平等院などと比し、これら権力や宗教的建築物とは関係のない一般家屋の最高技術として紹介している。このことが、後に白川郷が注目されることとなる大きなきっかけとなった。現在は岩波新書より増補改訂版として出版されている。

[23] 総務省「平成13年 社会生活基本調査」全国・生活行動 ボランティア活動（平成13年10月30日現在）

[24] 厚生労働省 監修『厚生労働白書 平成16年度版』、ぎょうせい、2004年、P.380
全国社会福祉協議会調べ、「全国ボランティア活動者実態調査」数値は2001年12月31日現在のもの

[25] 既出 「平成13年 社会生活基本調査」

[26] 前掲調査。10歳～14歳が36.3%、15歳～19歳が24.0%、20歳～24歳が19.7%、25歳～29歳が18.3%、30歳～34歳が24.6%、35歳～39歳が36.1%、40歳～44歳が38.4%、45歳～49歳が34.7%、50歳～54歳が31.0%、55歳～59歳が30.9%、60歳～64歳が30.5%、65歳～69歳が31.4%、70歳以上が25.5%である。

[27] 厚生労働省 監修『厚生労働白書 平成16年度版』、ぎょうせい、2004年、P.380
全国社会福祉協議会調べ、「全国ボランティア活動者実態調査」数値は2001年12月31日現在のもの

[28] 郡上おどり史編纂委員会＝編『歴史でみる郡上おどり』八幡町発行、1993年12月、P.224～P.225。明治政府が推し進めた民俗芸能禁止政策に対して、大正時代には郷土の伝統文化再興の運動が起こり、全国各地で盆踊りなどの保存会が結成された。たとえば、白川村と同じく岐阜県内の郡上おどりは400年間続く踊りとして人々に愛されているが、明治期の盆踊り衰退に心を痛めた人々を中心に、「踊り保存会」が発足したのは大正13（1923）年のことである。

[29] 飯尾良英『ボランティアグループの運営と学習についての研究－岐阜県におけるボランティアグループの事例を通して－』中部女子短期大学紀要26号、1997年、P.339「活動上の問題点」

[30] 前掲書、P.358～359

[31] 河畠 修「暮らしの中の福祉文化」一番ケ瀬康子、河畠 修、小林 博、薗田碩哉 編著『福祉文化論』有斐閣、1997年、P.16

[32] Iターン、Uターン、新規就農者等で、定住する人たちやその家族に対して、奨励金や補助金を出したり、土地や住宅の貸与、条件付の無償提供を行なう自治体は各地にある。

参考文献

Bruno Taut 著・篠田英雄 訳『日本美の再発見』、岩波書店、1939年

江馬三枝子『飛騨白川村〔新装版〕』未来社、1996年

郡上おどり史編纂委員会＝編『歴史でみる郡上おどり』八幡町発行、1993年12月

福武 直『日本の農村』東京大学出版会、1971年

福武 直「日本農村社会論」第三章 村落社会の構造『福武 直 著作集 第8巻 日本農村社会論・現代日本社会論』東京大学出版、1976年

濱野一郎・野口定久・柴田謙治 編著『コミュニティワークの理論と実践を学ぶ』みらい、2004年

飯尾良英『ボランティアグループの運営と学習についての研究－岐阜県におけるボランティアグループの事例を通して－』中部女子短期大学紀要26号、1997年

一番ケ瀬康子、河畠 修、小林 博、薗田碩哉 編著『福祉文化論』有斐閣、1997年

家族問題研究会 編集『山間聚落の大家族』川島書店、1988年

河畠 修「暮らしの中の福祉文化」一番ケ瀬康子、河畠 修、小林 博、薗田碩哉 編著『福祉文化論』有斐閣、1997年

厚生労働省 監修『厚生労働白書 平成16年度版』、ぎょうせい、2004年

奥田道大・和田清美 編著『第二版 福祉コミュニティ論』学文社、2003年

白川村史編さん委員会 編集『新編 白川村史 上・中・下巻』1998年、白川村

庄司洋子、木下康仁、武川正吾、藤村正之 編著『福祉社会辞典』弘文堂、1999年5月

竹内 勉『民謡－その発生と変遷』角川書店、1981年

厚生労働省「市区町村別合計特殊出生率・標準化死亡比（平成10年～平成14年）」

総務省「平成12年度 国勢調査」

総務省「平成13年 社会生活基本調査」

全国社会福祉協議会「全国ボランティア活動者実態調査」（2001年12月31日）

白川村役場「白川村村政要覧」、1997年

白川村役場 企画・編集『白川村第五次総合計画 2001～2011』白川村、2001年4月